

2023年3月の総評：木下龍也

## 固結び

かつて激しい人がいた／合川秋穂さん（京都府）

私が「激しい人」をしっかり縛るための「固結び」だったのか、あるいは私を「固結び」で強く縛るような「激しい人」だったのか。いまでもその「固結び」が私の胸を締め付けているのか。いまでもその「激しい人」を私は欲しているのか。懐かしんでいるだけなのか。後悔とも、未練とも、懐古とも読める。いずれにせよ、関係が切れてしまったあとも、ほどけない記憶なのだろう。読む人の経験によって表情を変える一句だと思う。

斧を振るねばつく斧を振る／長谷川柊香さん（宮城県）

何に斧を振っているのか、が書かれていないことがポイントだろう。読者はその何かを想像で補うことになる。「ねばつく」のは蓄積する疲労によるものかもしれないし、絡みつく獣の体液によるものかもしれない。ただ、「斧」が「ねばつく斧」に変容していることを考えると、一振り目→二振り目というシーンと読めるため、疲労の線は薄くなり、体液の線が濃くなる。だとしたら「ねばつく」という淡々とした捉え方は恐ろしくも思えるが、それは我々の日常に屠殺というものがないからかもしれない。

## 尾行という

しぐさのことを思いつつ

ない電柱を街に見出す／からすまあさん（神奈川県）

歩行を「尾行」と思うだけで、前をゆく人が調査対象者に見えてきて、身を潜めるための物体としてそこに「ない」はずの「電柱」が見えてくる。脳内ひとり探偵ごっこだ。「思いつつ」「見出す」だけで、そのような動きをしているわけではないから、通常の歩行と変わりなく、第三者から見ても奇妙な人だとは思われない。脳からこぼれない限り、誰にも迷惑をかけない妄想だ。さあ、被っていないハットを深く被り、羽織っていないコートの襟を立て、持っていない拳銃の残弾を数えよう。

厚揚げ18号／ほのふわりさん（京都府）

本来、番号がふられないはずの「厚揚げ」に「18号」と付け足す。それによって生まれるのは、1号～17号、つまり「厚揚げ」が「18号」に至るまでの過程、そして19号、20号と続いていく可能性である。点として存在する「厚揚げ」が線となり物語が付加されるのである。しかし、なぜ「厚揚げ」なのかがわからない。わからないからこそ消化できずに想像はふくらむ。そこに魅かれた。こんなタイトルの小説があったら読んでみたい。

漬け込んだ袋の中の鶏肉を  
ねるんもろんとあやすのが好き／うろ仔さん（北海道）

たれに漬かった「鶏肉」をビニール越しに揉むときのオノマトペとして「ねるんもろん」は、すばらしい発明だと思う。てのひらに伝わってくる感触も、鶏肉の動き方も、たしかに「ねるんもろん」である。「ぶりんぶりん」や「もによんもによん」では他の行為にも当てはまりそうなので弱い。「漬け込んだ袋の中の鶏肉を」揉むときにしか当てはまりそうにない限定的なオノマトペだからこそ、その行為から切り離せないオノマトペとなった。揉むを「あやす」としたのも巧い。あれは「鶏肉」の機嫌をとっていたのか。

西向きの部屋に光が差し込んだ  
めちゃくちゃ泣いた  
あとぐらい寝た／白雲亭入道さん（京都府）

薄暗かった部屋が西日によってぼんやりと明るくなり、すこしだけあたたかくなり、なぜだかわからないけれど涙が溢れてくる。そんな四句までの切ない光景が、結句で一気にほほえましい光景へと転調する。お見事。胸を締め付けられて、ぱっとほどかれるような。大丈夫？と肩に置こうとした手で、そのまま「いや、寝たんかい！」とツッコミを入れたくなるような。こんなにほっとする裏切りはなかなかない。

尺八の音神様がくれたから  
毎日吹いてお返しします／貴田雄介さん（熊本県）

「尺八」は人がつくったものだから、世の中には同じものがたくさんある。けれど「尺八の音」は、吹く人によってそれぞれ違う。上手いからではなく、下手だけど、でもなく、その「音」は「神様がくれた」ものなのだ、と素直に受け入れられる澄み切った心に魅かれた。昨日の自分と今日の自分で比べても「音」は違うだろう。だから「毎日吹いてお返し」をする。こんなふうに信じ、ひとつのことに没頭できる人を天才と呼ぶのかもしれない。

春の朝喪服売り場ですれ違う／にしざわゆうとさん（福井県）

死は日々と地続きにあるけれど、普段は遠くに感じられる。「喪服売り場」も同様だ。どちらも、だれかの死に接することで、やっと意識できるものかもしれない。同じだれかを亡くしたのか、それぞれに違うだれかを亡くしたのかはわからないが、同じタイミングで喪服を必要としたふたり。けれど、ふたりは出会うではなく、再会するでもなく、ただ「すれ違う」。ドラマにしすぎないこのバランス感覚がすばらしい。ドラマにしすぎると、ふたりともまだ弔う側であり、まだ身体を持っている側であり、なぜか同じタイミングで喪服を必要とした、という奇跡が霞んでしまうだろうから。

つぶれちゃうほど抱きしめて

ほしいから

急所を見せつけながら歩いた／汐見りらさん（東京都）

「見せつけながら」歩くことのできる人間の急所は、顔面、こめかみ、額、目、乳様突起、顎、首、みぞおち、脛、アキレス腱あたりだろう。例えば、顔をときおり相手に向けるだけでも「急所を見せつけながら歩い」ていると言えるはずだ。あるいは「急所」というのは心の弱い部分のことで、例えば、つらい過去について話をしながら歩いているのかもしれない。けれど、なぜ主体はこんなことをしているのか。それは「つぶれちゃうほど抱きしめてほしい」と言えないからだ。不器用な方法で、私はこんなに弱いのだ、だから「抱きしめてほしい」ということを伝えようとしているのだ。隣を歩くほど近くにいるのに、こんなに切ない遠回りはない。

また僕が夢で死んだと母さんが

りんごの皮を剥きつつ話す／サトヤマキューさん（鹿児島県）

息子が「夢」で「死んだ」。最初は「母さん」も心配し、恐れただろう。息子本人には話せないほど、ひとりで思い悩んだかもしれない。けれど、回数を重ねるごとに、その「夢」の恐ろしさは薄れ、いまでは「りんごの皮を剥きつつ」なんでもないことのように「話す」ことができている。一方、「母さん」とは逆に恐ろしさが次第に濃くなっていくのは「僕」のほうである。「母さん」が何度もそれを夢に見るのはなぜだろう。「母さん」は僕に死んでほしいと無意識に思っているのだろうか。もしかして正夢になるんじゃないか。「母さん」の「夢」だから「僕」にはどうしようもない。過ぎていくのをただ待つしかないのだ。

以上です。

4月分も楽しみにしております。